



(座談会開催日2020年12月4日・鹿児島市)

50周年記念誌編集委員会

座談会

歴史が教えてくれること、 未来へ伝えていきたいこと。

生協コープかごしま創立50周年の節目に、

これまでの歴史を記録に残そうと

「生協コープかごしま50周年記念誌編集委員会」が

2019年秋に発足しました。

メンバーは、編集委員長に会長理事の山田比呂美、

委員として会長経験者の原口君代、中島美由紀、和田千恵子。

元理事長の坂元義範、理事長の松蘭孝夫の6名です。

記念誌の編集を通して、50年の歴史にあらためて思うこと、

また伝えたいことを専務理事の高山和士の司会で語り合いました。



50年の歴史を振り返り、 「生協とは？」を考える。

高山 司会を務めさせていただきます専務理事の高山です。2021年4月1日に、生協コープかごしまが創立50周年を迎えます。今日は50周年記念誌編集委員の皆様にお集りいただきました。記念誌を編集するにあたり、歴史を紐解く中で感じたこと、改めてお気づきになったことなど、お話を伺いたと思います。50周年を記念して、3つの記念誌が作られます。委員長を務めておられる山田さん、内容をご説明ください。

山田 3つの記念誌は「50年史」「50周年記念誌／虹の花束」そして、マンガ「あいの不思議な旅～生協コープかごしま誕生物語～」です。「50年史」は歴史をできるだけ正確に記録を残すためのものです。「50周年記念誌／虹の花束」は、生協の歴史に深く関わってきた方々のお話を集めました。マンガでは、生協の誕生についてわかりやすくお伝えする中身となっています。3つの記念誌を通じて、歴史を記録すると同時に、今の時代に改めて「生協とは？」ということをご一緒に考える機会になればと思っています。

高山 ありがとうございます。50年前に、子ども達に、加工した牛乳ではなくしぼったままの牛乳を飲ませたい、安い牛乳が欲しいというお母さんの願いが集まって作られた生協ですが、現在組合員が32万人を越え、事業高も300億を越える規模となりました。一步一步積み重ねてここまで来た訳ですが、皆様は、その歴史に改めて触れていかがでしょうか。まず、創立時のことを坂元さんからお願いします。

プロフィール



原口 君代

1996年から理事。2002年～2007年度に会長を務めた。2008年～2011年度に顧問。



中島 美由紀

1998年から理事。副会長を経て2008年～2011年度に会長を務めた。2012年～2015年度に顧問。



和田 千恵子

2002年から理事。副会長を経て2012年～2015年度に会長、2016年度から顧問を務めている。



山田 比呂美

2008年から理事。2014年度から副会長、2016年度から会長を務めている。



坂元 義範

1970年にくらしを守る消費者の会事務局。創立から常勤の常務理事。専務を経て1998年～2005年度に常勤の理事長。2006年度に副会長を務め現在、常任顧問。



松蘭 孝夫

1977年に入協。2006年から常務理事、専務理事を経て、2014年度から理事長を務めている。



司会 高山 和士

1984年に入協。2014年から常務理事。2016年から専務理事を務めている。

坂元 生協コープかごしまの創立前のお話をします。1967年に鹿児島県生協連が、労働金庫や住宅生協が開発した鹿児島市の永吉団地に生協の店を作りました。しかし、事務局をしていた生協が撤退したため、鹿大生協が担うことになり、その店に私も派遣されました。しかし、開店からわずか3年後には経営が行き詰まり閉店しました。そのときに、「他の組織に依存しない自立した組織を作り、組合員には協同組合の組合員としての意識を持ってもらわないと成立しない」という教訓を得たのです。そして、私達初期のメンバーが「鹿児島市民生協」を作るときには、とにかく「生協は理屈で物を考えます」と言ってきました。「めんどくさいのが生協です」と、5人以上で班を作って共同購入することで良い物を安く買えることを説明しました。「苦情で生協は運営されます」とも言ってきました。当時は、一般的には店やメーカーなどの売側が強く、消費者が文句を言えなかった時代。生協は、その逆で、消費者から発することが運営につながることを伝えました。そんな理屈をいっぱい言って、スタートさせましたね。

いたのですが、「生協＝共同購入」だと思っていて、鹿児島の生協で運営委員になってから、坂元さんに、協同の意味とか、生協の成り立ちの話聞きまして、ここは何でも話し合うすごいところだなと感じました。編集委員会で創立の経緯を知ると、理念を大切にされてきたことが理解できる気がします。

高山 原口さんは、「社会福祉法人 麦の芽福祉会」との関りもありますよね。

原口 最初に運営委員になったときから、「麦の芽福祉会」の募金活動をしたり、施設にお手伝いに行ったりして、今でも助け合いの会で作業のお手伝いに行ったりしています。当初の関りは1980年代ですから、「麦の芽福祉会」もできたばかりで、まだ小さな家の中で作業していたころでした。「麦の芽福祉会」は障害を持つ方々の働く場の確保を目的に作られた訳ですけども、生協がリサイクルや袋詰め作業などに始まり、長年その発展に関わってきた歴史などを知ると、そういった方々が輝く場づくりに役に立っているなあと思ってしまうところなんです。

高山 「麦の芽福祉会」との提携は、現在は移動店舗、テナントショップなどに広がってきておりますね。では、中島さんはいかがでしょうか。

中島 生協の創立期の記録などに触れて、当時の組合員さんの熱意と行動力に改めて感銘を受けました。自分達の暮らしに関わる食べ物の安全性や価格の問題に対して、安心できるものを要求するために立ち上がった方々がいたこと。坂元さんがお話されたように、生協という形を通じて実現しようとしてきたのは、やはり素晴らしいと思います。そして、坂元さんが「理屈を大切にしてきた」とおっしゃいましたが、それは50年間脈々と受け継がれてきたのではないかと、思います。



「めんどくさい」＝みんなで力を出しあう、「みんなの意見（苦情）で生協を運営する」ことを呼びかけながら鹿児島市民生協への加入を訴えた。

高山 ありがとうございます。委員の皆様にもお一人ずつ、記念誌編集に携わって、印象に残ったこと、気づかれたことなどをお聞かせください。まず、原口さんお願いします。

原口 私は、鹿児島出身の夫と結婚して、こちらに来て40年になります。当時、夫の実家への行き帰りに生協の紫原六丁目店の近くを車で走る機会が多かったのですが、その店に本当にいろいろ理念が書いてあって、ここは一体何だろう？と思った記憶があります。私は、県民生協加入前にも東京で生協に入って



麦の芽福祉会とは1987年から提携スタート。環境問題と社会福祉に共同で取り組む。写真は、同会による牛乳パック回収（1991年）。

高山 中島さんの世代でもそれを感じておられると…。

中島 私自身は、80年代後半に生協に加入していますので、システムや組合員組織など、いろいろなものが出来上がった中に入ってきました。最初は、生協は安心な食べ物を得るための手段、としか思っていませんでした。しかし、活動を始めて、協同組合原則や生協とは何か?を学んだりして、それが非常にためになりました。「生協は物を得る手段だけではなく、組合員の利益を守り、そのことを通じて社会を良くしていく力や働きを持っているのだ」と。会長理事時代には商品事故の問題もあって大変でしたが、生協らしい理念を忘れずに向き合ったから乗り越えられたし、今があると思います。歴史をたどると、生協コープかごしまは、協同組合の理念を非常に大切にしてきた組織だと実感しています。

高山 ありがとうございます。和田さんは編集委員会でどんなことをお感じになりましたか。

和田 私も「生協は安心できるものを得るためのところ」だと思っていて、一人の主婦として利用するところから始まりました。東京から嫁いできて、近くに知り合いもいなくて非常に寂しい思いをしていたときに、生協を通じて友達の輪ができ、組合員活動を通じて社会に目を向けるようになりました。生協と出会っていなかったら違う人生になっていただろうと思っています。つながりを持つことの楽しさ、組合員活動の素晴らしさ、ここで得る喜びを味わってほしいと、ずっと組合員拡大とか、仲間づくりに関わってきたのですが、50年の歴史を見ながら、その時代その時代の方々が大変苦勞されながらも、一人でも多くの方を仲間に、という同じ目標に向かって動いてきた協同組合であることを改めて感じています。

高山 みなさん、50年の歴史に触れて、改めて生協の良さを感じたというお話だったと思います。現在の会長理事である山田さんは、いかがでしょうか。

山田 はい、まずこの場に自分がいること自体が生協のなせる業だったんだと(笑)。私のように子育てだけをしていた人間が、こうやって皆さんから、知らないころのお話を聞かせていただく貴重な経験ができたことに感謝しています。一人ひとりがこんな社会になればいいなという思いで、皆で力を合わせて進んできた生協、そして今ここに自分がいる…ほんの手前のところに関わっているんだと。これまでに作り上げられてきた生協の歴史に、ただただ感動しています。



共同購入の班配達の様子(1985年)。配達された商品を仕分ける場であり、仲間づくり、情報交換の場でもあった。

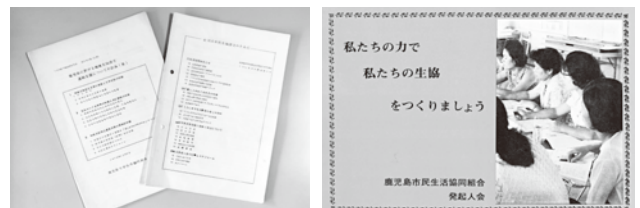
高山 松蘭理事長、いかがでしょうか。

松蘭 50周年ということで、私自身のことを少し振り返りますと、私も43年間、生協にお世話になっています。43年前、当時の組合員さんというのは非常に熱くて、厳しさと温かさがあったなと思います。与えられた仕事を一生懸命こなしていく中で、組合員さんとの関係の中で、自然に生協についての考え方が培われていったという、本当に育てていただいたと感じています。現職の理事長として、あらためて記念誌編集を通じて50年の歴史を振り返りますと、反省することがたくさんあります。ここをこういうふうにしたら良くなったんじゃないか、とか。反省しながらも、今の50年という節目に、現職として過去を振り返りながら現在の到達をしっかりと認識をする。そして、また今から更に50年という絵を描くかという中間点にいると感じています。

時代を貫くテーマ

平和、よりよい生活、助け合い。

高山 創立以来、生協が掲げてきたスローガンとして、「ひとりがみんなのために みんながひとりのために」「よりよき生活と平和のために」ということで活動してきた訳ですが、それぞれがご自分の特に印象に残っていることやテーマについてお話いただけたらと思います。



くらしを守る消費者の会と鹿大生協の市民生協設立に向けた方針・計画書等(左)。市民生協設立発起人会パンフレット(右)では、主婦一人ひとりが主人公となる市民生協を作ろうと呼びかけた(1970年)。

坂元 先程の話と重複しますが、生協の誕生の経緯について、あらためてお話をさせていただきたいと思っています。コープの歴史では、極めて自然発生的に生協ができたように描かれています。もちろん組合員の方で作られたことは確かですが、「買い物をする女性達が主人公となる組織」を作るために考え抜かれた計画が背景にあったということも事実です。先ほど申し上げたように、鹿児島における地域生協作りについては、鹿児島市民生協設立の前に、永吉団地で店を閉店した苦い経験をしている。だからこそ、実現できる仕組みを考えた、ということです。例えば、班を作って共同購入をする、というのは、「くらしを守る消費者の会」が始まった1970年頃は全国の生協でも珍しかったと思います。牛乳を共同購入で、というふうに組み立てたのは、全国的にも鹿児島が結構早い方だったのです。

高山 共同購入、という仕組みを先駆けて実践したということなんですね。

坂元 「共同購入の理論と実務」という本があって、1972年日本生協連の発行ですけれども、この頃になると全国でも共同購入がいっぱい出てきます。この本の冒頭に『「めんどくさいのが生協です」というチラシを作った生協がある」という記述があって、鹿児島の生協が紹介されています。当時の世の中では、スーパーマーケット、チェーンストアが出始めた頃ですが、その頃に共同購入というものを作り始めたのが、生協の歴史の中では重要なことだったのかなと。同時に欲張って鹿児島市民生協は創立の翌年に店まで作りました。共同購入をしながら店まで作るというのも全国的にあまりなかった時代です。店が当初はずっと赤字で、そのおかげで苦労しましたが、やっぱり店も並行してやって良かったと思います。



市民生協設立の翌年に第1号店「紫原店」をオープン(1972年)。「店舗をつくる会」を中心に組合員みんなで組合員拡大や開店準備を進めた。店舗の実現には、日生協、鹿大生協をはじめ全国の生協、農協などの支援もあった。

高山 組合員さんの力と共に、地域生協を実現するための綿密な計画があったということですね。当時から、様々なくらしを守る運動も盛んだったようですね。

坂元 1974年にインフレが進んで「狂乱物価」がおきて、物価が異常に高騰したことがありました。そのときに、「物価値上げ反対」として、協同組合のシンボルである虹の旗を立てて、メーデーに参加したことがありました。なぜ生協は政治活動をするのか、と論議もありましたが、基本的に、「台所から暮らしを見よう、政治を見よう」という考え方があり、鹿児島では家計簿調査活動を進めました。それがメーデーへの参加につながったということです。暮らしを守る、平和を守るという主張は、このころから一貫してあったと思っています。

高山 改めて知ることもあり、いい勉強になります。原口さんは、ご自身の関わった活動で印象に残っていることはありますか。



鹿児島の空襲を通じて平和を考える「鹿児島戦争・空襲展」を1984年に開催。関連して「洋上平和の集い」や平和文集発行にも取り組んだ。これを機に平和を考える催し「6.17平和の集い」が始まり、毎年続いている。

原口 私が運営委員長をした時代に、最初に参加したのが「6・17平和の集い」で、網屋先生の講演で「あたらしい憲法のはなし」を聞きました。初めてそういう話を聞いて衝撃を受けて、平和の問題に関心を持つようになりました。戦後50年に戦争体験文集に携わり、会長時代の戦後60年には文集制作と共に、「6・17の集い」を2日間にわたって開催して、朗読劇「この子達の夏」を上演しました。劇団のシナリオを使わせていただいたのですが、自分達でも鹿児島の戦争体験をシナリオにできないかという話が出て、みんなでやりましょうと。そこから10年にわたり毎年制作を続けて、戦後70年のときに5冊の冊子にいただきました。この活動を通じて、多くの戦争体験に触れ、また、先輩の組合員さんからも勉強をさせていただいて、平和を考えることが身近になりました。さらに、中島さんと一緒にニューヨークの国連本部で

開催された核不拡散条約（NPT）再検討会議にも参加させていただきました。世界中から集まった方々と行進して、虹の旗にメッセージを書いていたことも良い思い出です。こんな機会をいただけたのも、平和活動をずっと続けてきた鹿児島の生協だからこそ、と感謝しています。

高山 NPTの話が出ましたが、中島さんも参加されたのですよね。生協の平和活動についてはいかがですか。

中島 生協では「6・17平和の集い」という身近な平和を考える機会があれば、全国の生協の仲間と共に原爆や戦争の悲惨さを学ぶ、長崎・沖縄への「平和の旅」もあります。憲法の学習も生協コープかごしま単独でずっと継続していて、地味ではありますが、頑張っていると思います。これを続けることは非常に大きいと思っています。生協という場で、大切なことを学び知り、主体的な消費者、生活者となり、それを広げ、力に変えていく。そのためにも、事業は事業で大切なのですが、組合員活動も難しい状況ながら大事にしてほしいと思います。

高山 事業を大切にすると共に、組合員活動を大切にしてほしいと。また、組合員活動に加えて、生協の枠組みを超えて取り組むべき問題もありますね。

中島 そうですね。「ひとりがみんなのために、みんながひとりのために」という助け合う組織ですから、ある一定は組合員の声や力によって、商品や要望を生協内で完結させることは可能です。しかしスローガンにある「よりよき生活と平和のために」を実現するには、生協内だけでは解決できない問題がたくさんあります。組合員の財産を使って事業をし、組合員の生活向上のために利益を還元していくことは生協の役割ですが、組合員を含む社会全体を変えるには限界があります。ただ生協の枠組みを超えた問題でも、間接的なアプローチや発信はできる。坂元さんがお話になった家計簿の調査もその一つと言えます。私達の暮らしは社会と政治と直結しているので、日常の暮らしから社会を見る、政治を見ることは非常に大事なことだと思います。生活状況や社会的制度の不備などを常に知ったり、学んだり、考える必要がある。家計簿の付け方や年金・保険の学習、平和や憲法の問題など、生協が長年にわたり学ぶ場を作り続けてきたことや生協内外に発信してきた実績は評価できるものですし、今後も守っていくべきことだと思います。



1976年から継続する家計活動。現在は、家計調査グループが生計費動向を分析。日常の暮らしから社会を見る、政治を見るための貴重なデータとなっている。

高山 ありがとうございます。和田さんはいかがですか。

和田 生協は食の安全・安心をずっと追及していますが、その商品を手に入れたいと思ってもできない方々、高齢者や過疎地の方など、買い物に不自由している方に対して、「くらしの助け合いの会」がすごく重要な役割を果たしているし、地域に根差した活動になっていると思っています。これはやはり生協独自の活動だと思っています。私は、組合員活動を通じてずっと、行き届かないところにちゃんと商品を届けたい、地域の人で困っている人に対して生協ができることがあるのではないかと考えています。組合員同士で助け合いおうという精神が、生活を支えたり、生きていくことを支える根底だと思うので、安全な食品を作る、ということから一歩進んで、それを誰にでも届くような買い物支援のシステムを実現できる可能性が生協にはあると思っています。

高山 商品づくりはもちろんですが、助け合うという形が生協らしさであると。誰も取り残されないようなシステムが求められているということですね。

和田 そうですね。そして、私が忘れられないのは、副会長、会長をさせていただいたときに、商品事故の影響で生協の信頼が損なわれ、事業的に厳しい時期だったことですね。信頼回復のために奮闘する職員のご苦労も見てきましたし、組合員も一丸となって取り組んだ時期でした。大変厳しく苦しい時代で、笑顔がない理事会に出たことも何度もありました。どうやったら回復するかと悩みながら、生協活動を越えてやっていく感じでしたね。当時を振り返るとなんでも乗り越えられる、あれがあるから今があると思える経験でした。一方で、私達は組合員の立場から見ているので、理事長はじめ、職員のご苦労はもっと大きかったと思うのですが…。でもそういう困難に対して、消費者として傍観するのではなく、一緒に関わったということが生協だからこそ、と思っています。

高山 組合員と職員一丸となって取り組んだからこそ今がある…と。非常にご苦労され、ある意味苦しかったという率直なご意見もありました。その後を継いで現在も会長を務められている山田さん、いかがでしょう。

山田 和田さんが苦労されている時代には、自分が理事であることだけで精一杯で、その大変さは深くは理解できていなかったと反省しています。職員の方にも笑顔がなくて…。私が会長をバトンタッチされたのは、いろんな意味でどん底のときでしたので、もう上がるしかない、やるっきゃない、という気持ちだけでした(笑)。

高山 当時のことで印象に残っていることはありますか。

山田 はい。いろいろと再建を進めていた時期でしたが、特に教育の大切さを強く感じた出来事があります。2014年度末から無店舗職員対象の職員集会が数年ぶりに再開されたのですが、最初はただただ元気で賑やかな集会で、発表者を茶化す職員もいたりして…。でも2年、3年と回を重ねる毎に企画自体も磨かれ、相手に敬意を払った発表内容になり、皆さんが真剣に聞いて、真剣に拍手して、事例を共有して。そういう職員全体、組織全体の成長を目の当たりにして、仕事の意義を知り、学び、感じる事が、人や組織を変えていくんだと感動したことを覚えています。



無店舗事業の職員集会で事例交流を行う「第3回学びんびっく」(2018年)。事業再建に向けて職員一丸となって取り組んだ。

高山 ありがとうございます。経営再建のところから、教育の大切さについてお話をいただきました。松菌さんからお願いします。

松菌 50年も経つと、いろいろなことが起こりますし、そういう時に生協としてどういう姿勢で向き合うのかというのが問われるのだと思います。先ほど中島さんのお話にもありましたが、全国の協同組合や生協の中では、運動という言葉はほとんど使わなくなってきています。活動になっているのです。活動というのは

組織内の動き方で、運動というのは社会的なことを含めて広く一般に働きかけをして、皆で行動を起こすということ。その運動性が段々少なくなっています。だからあえて鹿児島県の生協では、活動という呼び方と、カッコ書きでも(運動)と必ず入れています。組織内では要求実現できないことは、周りの人と手を結びながらどう実現していくか。だからこそ運動性が必要で、大事にしなければならないと思います。

高山 運動性を持って社会にどう働きかけるか、ということですね。

松菌 運動性と言えば、感動した出来事があります。1993年に大冷害が発生して国産米が高騰し、WTO(世界貿易機関)がちょうど95年にスタートするという直前のタイミングで輸入米(ミニマムアクセス米)を入れるという政府方針がありまして、冷害で国産米が不足しているのに、輸入せざる得ない状況になりました。それで、国産米と輸入米の抱き合わせをしないと販売できないという国の指示が出たのです。生協では産直で毎年生産者と一緒に取り組んでいるのに輸入米と抱き合わせて買わないといけないうのはおかしい、と。そのときに、組合員さん12名くらいで、県と食糧事務所に直談判に行ったんですよ。そこですごいエネルギーを感じて。長年にわたり田植え、稲刈り含めて生産者と付き合ってきて、私達は縁故米として生産者からいただいて供給しているんだと、かなり怒りをぶちまけて。生産者も生協とは縁故関係だからここにある米は出しますよ、と言ってきて。結局、抱き合わせ販売をしなくてよくなりました。交流を通じた取り組みに対する組合員さんの思いと力、そして生産者がそれを支援してくれるというつながり方、これが本当にうれしかったです。これが一つの運動性というか、生協の中だけの活動ではなくて、社会問題に対する意志の示し方というか、やはりこういうことが必要だなと感じた出来事でした。

高山 社会に対して働きかけると同時に、社会で果たす役割も大きくなっていると思いますが、いかがでしょう。

松菌 先程和田さんも言われたように、社会では、生活全般に関わる問題が次から次へと出てきています。一方で、公的な部分はどんどん削減をされていく中で、取り残される方々が出てくる。その時に生協という、一つの消費者組織が地域とどう関係性を作っていくのかというのが、問われていると思います。それは事業が前提にないといけない。協同組合の

アイデンティティに関するICA（国際協同組合同盟）声明の「協同組合の定義」の中に「事業を通じて組合員の要求を実現する」とありますが、事業経営が安定しないと要求が実現できない、ということです。先ほどの米の話のように組合員さんのエネルギーを借りながら要求を実現していく必要があると思っています。

常に問い続けたい 「協同組合」の意味。

高山 ありがとうございます。次に50年の歴史をふまえて、後世に伝えたい、これからの方々に教訓となるようなものを少しお示しただければなというふうに思います。山田さんいかがでしょうか。

山田 私は活動歴が短いのですが、私みたいに何も知らなかった人間も生協に関わるのが当たり前の時代に入ってきていると思います。だからこそ、生協がどうして生まれたのか、何を大切にしているのかなど、組合員も折々に学んでいかなければならないと思います。歴史を学ぶということは、想いの共有につながりますので、歴史を含めた理念教育をこれからも大切にしていきたいと思っています。

高山 はい。理念に触れる機会がないまま生協をご利用されている方々もいらっしゃると思いますが、組合員さんにも生協の原点を知っていただくような教育が必要だろうということですね。

原口 もっとたくさんの人に教育を受ける場を提供できるような、そんな形ができたらいいなと思います。私も自分自身のことを考えると、何かのきっかけがあって生協活動に関わっている訳ですが、これからの方にも、そのきっかけを逃さないでほしい。自分が勉強したら、他の人にもそれを伝えて、たくさんの人に教育を受ける場を提供できる形ができたらいいなですね。総代も毎年選挙で少しずつは変わりますが、ずっと同じ方が続けている場合もあるような気がしますので、門戸を新しい方々にも開けていただいて、生協のことを分かって利用する方がもっと広がったらいいなと思っております。

高山 新しい方々にも学びの場を広げて、ということですね。ほかの方で、ご自身の関わった活動で印象的だったお話はいかがでしょう。

坂元 現役時代にはもちろんいろいろありましたが、私が一番いい経験させてもらったのは、2014年以降の

中で「協同組合塾」です。レイドローのICA大会での報告をはじめとする、国際的な生協の歴史や論文について学ぶ場に、若い職員と一緒に参加させてもらったのが思い出に残っています。やはり協同組合は何なのか、協同組合は他とは違うということを常に問い続けるのは大切なことだと思います。

高山 協同組合がどのような役割を果たすのか…ということも重要ですね。

坂元 現代の貧富の格差や地球温暖化などの大きな社会問題は、利潤追求の資本主義が行きついた結果であり、競争原理の新自由主義の行きついた結果です。そういう時代の中で、2012年の国連の国際協同組合年のスローガンは「協同組合がよりよい社会を築きます」でした。“よりよい社会を築く”とはどういうことなのか、それは単に協同組合であれば実現できるというよりも、協同組合が持つ理念や思想の中に、協同組合が持つ運動性や協同組合が持つ組合員との関係などを全て含めて、「資本」と「出資金」の違いに協同組合の可能性を見据えている。同時に経営上の難しさだとか、人と人とのつながりの問題など内包しながらも、やっぱり“協同組合がよりよい社会を築いていく”ということについて、ぜひ次世代にも引き続き噛みしめて進んでいってほしいと思います。コロナ後の社会をどうしていくかということも含めて、ですね。

高山 協同組合の良さとか、協同組合とは何かということをしかりと知らせていくことが大事なことですね。そういった意味では、今回、皆さんが携わっている50周年記念誌は大変重要な役割を果たすと思います。

坂元 正直言って私が50周年誌を作るまで生きていないと思っていませんでした（笑）。45周年ぐらいが最後かなと思っていたのですが、あれから長い時が経ち、創立時の体験を持つ数少ない者として、記念誌編集に少し責任を感じながら、当時の記憶をつないでいます。一つ提案なのですが、例えば今回作成した生協創立を描いたマンガを使って、組合員を何人か集めて読み合わせをすとか、そういうことができないかと。生協創立前に、今の市民劇場、当時は労演と言っていたのですが、そこが例会のたびにサークル会議を無数に開いていました。台本の読み合わせをしたり、テープを聞いたりしながら…。それが私にとって班活動のイメージになりました。今回も、ただ配布して終わりではなく、共同購入の配達担当、個配でもいい

から何人か集まって読み合わせしましょうよとか、そういうことが始まる新たな組合員の活動も生まれるのではとったりします。職員にもぜひ職場ごとで読み合わせなど工夫して活用してほしいと思います。

松蘭 中期計画の中にも、この50周年の記念誌、マンガを含めて職員教育の1つとして、きちっと位置づけて皆で学習するという項目を設けました。なぜ生協を作ったのかという歴史を学ぶことを重点にしました。また、“組合員と職員が学ぶ”とあえて入れています。これは、組合員さんと職員がお互いに同じ場で学び合うことが大事ではないか、という提起でもある訳です。歴史でもずっとそういう経過を経ていきます。組合員さんと職員が一緒になって、例えばマンガを通じて、自分達の生協を語り合う場面ができると、また一歩進むのかなと思います。

中島 組合員と職員ということについては、以前は、専門委員会や班長会などを通じて商品や生協のことを直接話す場がありました。そういう時に、私達分からないことを職員が一生懸命答えてくれたり、資料も準備してくれました。その場で解決できなくても後で必ず誠実に対応してくれたというのがずっと心に残っていて、非常に信頼できる関係ができていました。お互い信頼関係ができて初めて、それぞれの立場で率直に話し合い、力を寄せていけるという自覚が生まれたところもあります。しかし今は新型コロナウイルスの影響で集まるのが難しいので、Webや紙媒体による細やかな情報提供や、SNSを使っての参加や交流など、何らかの場や機会が組み立てられたいですね。話題作りもそうですし、とにかく何かつながりやきっかけを作ってもらおうというのはすごく大切なのかなと思います。

松蘭 組合員さんに説明するために、職員は自分が勉強しないといけない。その中で成長していくのだと思います。それが職員教育の原点です。自ら学んでいくこともやはり大切ですし、対話を通じてお互いの気づきも生まれると思います。

中島 このマンガを動画にできたらいいですね。さらに分かりやすく、イメージしやすいと思います。

原口 マンガの活用については、今ある組織で読み合わせましょうということもいいのではないのでしょうか。子育てひろばで若いお母さん達とか、おしゃべりひろばでも、こんなのあったよと話のきっかけにして、読みたい人がいたら貸してあげようみたいな感じで

活用していけたらいいと思います。

山田 みんなで広げましょう、ということですね。

これからの暮らしを守る 新しいつながりの形。

高山 いろいろとイメージも広がりましたが、ぜひ実現していきたいと思います。最後になりますけれども50年の歴史に触れてみて、未来への提言をお願いします。50年の節目に思うことや、これからの生協への期待などもお聞かせ願えればと思います。

原口 本当に50年前の「めんどくさいのが生協です」と言っていた時に比べると、便利になりましたよね。今は、生協があるのが当たり前の中で加入して、理念教育とか協同組合原則の話などは知らないまま生協に関わっている組合員さんも多いと思います。そんな現状ではありますが、先ほども申し上げたように、一人でも多くの方に協同組合の素晴らしさに気づいてほしい、そして、それを学んだ人はまた別の人にまた教えて広げてほしいと思います。今すごくうれしいのは、松蘭理事長が各自治体の首長訪問をされていて、生協への理解が社会に広がりつつあることです。生協が地域社会に寄与している部分もあると思いますので、これからも頑張って、永遠に続かなきゃいけないし、続いてほしいと思います。

高山 はい。多くの方々に気づきを広めていただきたい、そして、生協の理念もオピニオンリーダーにも広がってきて、首長訪問ということでさらに広がってほしいですね。

和田 今、地域に根ざすということが課題になっていると思います。今の社会問題に向き合っていくには、行政に関わってもらいたいこともたくさんある中で、生協の頑張りを伝えることはすごく大切だと思うので、首長訪問で一歩ずつ前進しているのがうれしいです。地域の中で、いろいろな世代の方達が組合員活動を通して地域の活性化に役立っています。これからも、今のコロナや環境のことなど様々な問題がある訳ですが、そのときに基本となる協同組合とは何かとか、参加すること、つながることの大切さについても、歴史に学びながら、向き合っていくことが必要だと思います。50周年記念誌はそういう資料にさせていただけたらと思います。集うことが大変な時期ですけれども、時代に合ったやり方を工夫

しながら、それでもやっぱりつながっていくところが生協じゃないかな、ということが今回記念誌編集委員会に携わって分かったことです。職員においても、組合員活動においても「参加」は、多分永遠のテーマだと思うのですが、どういうふうにつながるかということのをこれからも追いつけてほしいと思います。



暮らしを支えるサービスは時代によって変化し続ける。買い物が困難な地域への移動販売事業は薩摩川内市との提携で開始。写真は、麦の芽福社に委託し鹿児島市と近郊で運行する移動販売。

高山 ありがとうございます。行政にも様々な働きかけをする中で、行政から相談を受けることも多々出てきております。生協は人と人とのつながりですので、生協の理念をもって地域の方々にも思いを伝えていければと思います。組合員活動の改革の中で、「参加」というのは大きなテーマになっておりますので、しっかりとやっといこうというご発言だったと思います。

山田 和田さんのお話を受けて、参加の大切さを痛感しておりまして、地域に根ざした組合員の参加をどう作っていくかが今後の課題だと思っています。今の組合員さん方は“ゆるいつながり”の中から情報を取捨選択するようですので、その個々にあった参加ができる組み立てと同時に、地域が抱える問題を自分事と捉えられる生活者の視点が芽生え、活動したくなるような仕組み作りも必要かと思っています。生協の学習会や交流会に自分自身の学びの場のつもりで参加していたら、いつの間にか地域で活動する人たちとつながって地域のお役立ちになっていた、なんて外向きの活動が増えていったらいいですね。

高山 参加の大事さですね。組織の中だけではなく、地域を良くして、活性化していくためにも、生協は外向きに活動を広げていかないといけない。リーダーとして生協の役割があるのではないかとというようなことだと思います。

中島 ほとんど言っていただきましたが、これからの生協コープかごしまに望むことは、やはり理念を大事にし続けてほしいということですね。そして、商品提供のみならず、子育て支援や家事援助など暮らしを支えるサービスをより広げていくことで、実績、組織力がさらに強くなっていけば、社会に対する発言力も増していくと思います。着実に積み上げていくことで存在感を持ち、しっかりアピールして社会を変えていく力になる。そんな信頼される組織として成長して欲しいと思います。新自由主義とかグローバル化の下、2012年の国際協同組合年で「協同組合がよりよい社会を築きます」と提唱されたように、協同組合はそういう役割を担った存在ですよ。一時的には注目されましたが、世間一般の共有と広がりには至りませんでした。それなりの歴史もありながら、なかなか光が当たらないのがとても残念です。今SDGsが注目されていますが、生協はこれまでの実践とそういう価値を持つ組織としては、先駆的な存在だと思います。いろいろな企業がSDGsを掲げて努力していくのは素晴らしいのですが、イメージ先行で結果的に利潤追求や環境破壊、何らかの犠牲を生み出してしまう危険もあると言われています。協同組合の価値にあるように、正直、公正、他者への配慮など…常に意識しながら、生協としての実践を示していくと共に、連帯していくことで力を発揮して欲しいと願っています。

高山 組合員さんの様々なニーズや願いをかなえてきた50年だったと思いますが、そういう声に responding していくことで力をつけてきて、社会にアピールする存在としても大きなものになってきたと。また、社会を良くしていくための任務、生協の役割というのは大きいのではないかということだったと思います。

坂元 今後の生協にとって、職員がどういう役割を組合員との関係で果たすのか、それから職員がどんな形で協同組合人になるのか、協同組合の考え方で職員がどう動くかということが最も大きな課題だと思います。ICAの創立以来、レイドロー報告の中にもある「生協ができると事務局中心になってしまう」ということにも関わります。広い意味での協同組合を世の中に広げるためには、例えば労働者協同組合にも挑戦し、それを支援するような生協であってほしいと思います。

高山 ありがとうございます。私事ですけども、29歳で中途採用で生協に拾われまして、私が思ったことは、「やっとなんか誤魔化さなくてもいいんだな」ということです。前の企業がお客さんをだましていた

訳ではないのですが、我々は組合員さんが50年前に作った生協を運営するのを委託されていて、組合員さんが我々の雇い主だと。だから、組合員さんをだますとか、そういうことは必要ない。もう真面目にそのままやればいいんだ、という想いがある、それが私の協同組合人としてのステータスです。お話を聞いて、組合員さんを引っ張っていく職員をどう作るのかを聞われていると思いました。最後に松菌さん、お願いいたします。

松菌 今、地域とのつながりや地域とどう連携するかを課題化して、ここ数年にわたり、自治体の首長訪問を続けています。ただ、生協は自治体・行政の受け皿にはならないということです。社会保障も段々削減されていきますので、自治体としては代替が必要で、だから民間委託というのが今の自治体の構想に入ってきています。しかし、請負いはしない、あくまでも地域で暮らす人が主体になって、自分達はこう困っているからどこか手助けしてくれないかというときに、生協がこういう機能を持っているから相談したらどうかという形です。自分達で、例えば自治会などが動かないといけない。そこに住んでいる組合員さんが困っているから生協が行くのであって、行政が困っているからやるのではない。あくまでも組合員、生活者の願いを実現するために生協ができることはしますけども、全体は地域が主体的にやってくることが必要です。そのためには生協という組織を理解してもらう。そのためにも、生協の理念と実践を見えるようにして、理解していただけるように。生協は人と人とのつながりの相互扶助の組織の在り方として、正直であったり、公開性があったり、他人への配慮があったり、社会的責任を持っていたり、そういう原理的な信条も理解をいただいて。そういう組織だから変なことはしませんし、お願いされてもできないことはできませんということも言わなければならない。これから、過疎や高齢化社会の問題がより深刻化する中で、食や医療介護、人とつながる住環境の問題などを皆でつながりあって維持するということが今からは非常に大事で、その一員としてしか生協はできないですが、組合員の要求に応じていくために、事業を安定化させて期待に応じていく。それを2020年に発表した「2030年ビジョン」として描いています。新型コロナの問題で組み直しが必要になっていますが、これから進むべき方向性について長期方針としてお示ししています。組合員の皆さんにはそれを機関紙等を通じてしっかりとお伝えしていきながら、首長訪問等で外に向かって伝えていく、それが現職の私としての課題であり、しっかりとやっていきたいと思っています。



各地の行政と地域の見守り活動や災害時の物資提供協定などを締結。南さつま市とは包括的業務協力協定を2017年に締結。

高山 ありがとうございます。最後のまとめとして少し話をさせていただきますと、50年の歴史に触れた皆様のお話を聞き、組合員さんがよくこの生協を理解して、こんなに生協を大きくしてくれたんだというふうに率直に感じました。組合員さんの声で「長年共同購入をして安心・安全なものを届けていただいて本当に助かっています」「今後も頼りにしています」「これからもずっとお店に行きますのでよろしく」というようなお声をいただいたときに、一人ひとりの組合員さんの期待に応えていくというのがありますし、何かマグマの力のような、未知の力が生協にはあるんだ。職員と組合員、理事会も含めてですけども、生協の原点である協同組合の定義や価値、原則を大切にしながら、理念に沿ったガバナンスを続けてきたことが、組合員さんにとっては、全体的な信頼につながっていったのかなと率直に思います。相互扶助や非営利協同等を教えられながら行ってきましたけども、今後のところではそれ以上の、他人への配慮や社会へのお役立ちなどが、もっともっと求められてくると思います。SDGsにあるように、環境や経済、社会の問題について、リーダーシップを持ってやるんだという役割が国連の方からも聞かれていますし、いろいろと生協が果たすべき大きな役割は今後も続くだろうというふうに思います。50年の歴史をしっかりと学んで、今後もっともっとこの地域社会にとってなくてはならない生協として、組織として一層努力する必要があると改めて今日感じました。ありがとうございます。